日蓮聖人における如来寿量品観

――「五重相対」、「五重三段」を中心として――

堀内紳行

一、はじめに

日蓮聖人（一二二二―八二）は、『法華経』本門寿量品の教相によって、本仏釈尊による我々凡夫救済の論理を求められている。この救済の論理とは、妙法五字を媒介とする題目受持の信行であって、我々凡夫が実践すべき仏道修行である。ここに『法華経』こそが本仏釈尊が説かれる最高の教法であって、この教えこそが下根下機である我々末代の凡夫を救う教えであることが知られる。

そこで、聖人が本門寿量品の教相をどのように判釈をされ、どのように我々凡夫の信行の姿を教示されているのかをあらためて確認しなければならない。

聖人は、釈尊の一代聖教において『法華経』こそ尊崇するべき経典であると定められる。

では、その根拠を尋ねると、那辺に求められているのであろうか。

それは妙楽大師述『法華文句記』[1]に示されている「十双歎」、すなわち「二十の大事」を根拠としている。[2]この法門の第一双目にて「二乗作仏」と「久遠実成」が教示される。「二乗作仏」の法門では、『法華経』迹門方便品の「略開三顕一」における一念三千の法門によって、一切衆生の成仏が明かされる。しかし、その二乗作仏が達成されるには、本門寿量品において「発迹顕本」が明かされ、釈尊が「久遠」であるからこその「真の一念三千」の法門を必要とされる。[3]

このように、釈尊の久遠の開顕によって、無始の仏界が開顕され、無始の九界の救いが成立し（本因妙）、いっぽうでは、無始の仏界が無始の九界に備わることによって、本果妙の成立となり、九界の真の成仏（一

切衆生の成仏）が達成されるというのである。

では、聖人が本門寿量品を重要視される論理を尋ねると、那辺にこれを求められるのか。

それは、『開目抄』における「五重相対」と『観心本尊抄』における「五重三段」によって、その重要性を確認することができる。

『開目抄』では、釈尊の一代聖教のうち『法華経』こそ最勝の教えであることが示されている。そして、本門重視の立場が明かされ、寿量品の教相と寿量品の文底（観心）を相対することによって、教相を依り拠とした観心修行（教観不二）が教示されるのである。

次に『観心本尊抄』では、釈尊の一代聖教を序正流通の三段分科することによって、末法における真実の教法が明かされる。すなわち、ここに釈尊の本因本果が具足されている妙法五字の題目こそが、末法の時代に流布する教法であって、教観不二の修行、題目受持が定まるのである。(4)

そこで、聖人が『開目抄』にて明かされる「五重相対」と『観心本尊抄』に明かされる「五重三段」について、あらためて尋ねていきたい。(5)

二、『開目抄』の五重相対

まずは、「五重相対」について確認していく。日蓮聖人遺文『開目抄』には、釈尊の一代聖教の教相判釈をするために「五重相対」が示されている。(6)「五重相対」とは、世間に普及している思想を五つの見地から判別するものである。この五つとは、①内外相対、②大小相対、③権実相対、④本迹相対、⑤教観相対である。この教相判釈によって、本門寿量品の重要性が示されるのである。

(1)内外相対

ところで聖人は、一代聖教を説かれた釈尊を「大導師」等と示され、(7)釈尊とは我々一切の衆生にとって、一番の導きの師であり、我々の迷いをさまし、精神をみつめる眼目であり、覚りへと渡す橋梁や生死の大河から覚りの世界に渡す船師であって、衆生の心に功徳の種を与えつづけう福田であることを教示されている。(8)すなわち、釈尊を「大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田」であられることで、釈尊は主・師・親の三徳が具備を象徴されている。(9)

一方、儒教やバラモン教の教えを説いている尹伊・務成・太公望・老子の四聖や迦毘羅・漚楼僧佉・勒娑婆の三仙は、聖人や賢人として称している。しかし、彼らは三惑を断ずることのできない凡夫である。そのために、四聖三仙が説かれる教えでは、我々衆生は生死の大海を渡ることが困難であり、六道の迷いの世界を越えることはできないのである。

すなわち、聖人が示されている釈尊とは、煩悩を断じ、生死さえも超越された仏であられる。

そのことを踏まえてつぎの説示に尋ねると、仏教と世間に普及しているあらゆる思想を判別する内外相対が明らかとなることが知られる。

「此仏陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで、五十年が間一代の聖教を説給へり。一字一句皆真言なり。一文一偈妄語にあらず。外典外道の中の聖賢の言すら、いうことあやまりなし。事と心と相符へり。況仏陀無量曠劫よりの不妄語の人されば一代五十余年の説教は外典外道に対すれば大乗なり。大人の実語なるべし初成道の始より泥洹の夕にいたるまで、説ところの所説皆真実也」[10]

ここには、釈尊が成道されてから入滅に至るまでの五十年間に説かれた教えは、一文字一文字すべてが真実の言葉である。一方、儒教やバラモン教といった外道を説く聖人も偽りのある言葉は示さず、実際の行動と理念は一致している。が、釈尊は、遙か遠い過去世から嘘偽りのない教えを説かれているため、三惑を断じていない凡夫が説く儒教や外道と比べると、釈尊が五十年の間に我々衆生のために説かれた教えこそ我々が取るべき教えであることが知られる。そして、釈尊が成道されて涅槃に入られるまでに示された教えは、すべて真実そのものである。

このようにして、仏教とそれ以外の教えを判別し、仏教こそ信じるべき教え、と教示される。これが「内外相対」である。

(2)大小相対

次に大小相対について確認する。これは、釈尊の一代聖教のうち大乗教と小乗教とで判釈することである。釈尊が説かれた八万ものある法門には、仏道修行を実践するに、自身に功徳を施す教えが説かれる小乗の教えと多くの人々に功徳を施す大乗の教えの二つに区分される。そして、個人の解脱を目指し、得道を得よう

とする小乗の教えと、菩薩が自己のみならず化他行にも努めなければならない大乗の教えを比較したときには、大乗の教えが重視されるのである。このことは、つぎの文から明らかである。

「但仏教に入て五十余年の経々八万法蔵を勘たるに、小乗あり大乗あり」[11]

これが「大小相対」である。

(3)権実相対

次に権実相対について確認する。これは大乗経典において、権大乗と実大乗との教相判釈である。大乗経典には、真実までの過程を説いている権大乗と真実を説く実大乗の教えがある。そして、これらの大乗経典には、文字として説き示されている顕教と秘密の法門を示す密教や、軟語として穏やかな言葉で教えを示したり、麁語として粗い言葉などで示されている。また、真実や虚妄の言葉もあり、多用な相違が存在している。

この大乗の教えのうち、『法華経』こそが唯一の釈尊の真実が説かれている教えである。このことはつぎの説示から明らかである。

「権経あり実経あり、顕教密教、軟語麁語、実語妄語、正見邪見等の種々の差別あり。但法華経計リ教主釈尊の正言也。三世十方の諸仏の真言也。大覚世尊は四十余年の年限を指て、其内の恒河の諸経を未顕真実、八年法華は要当説真実と定メ給しかば、多宝仏大地より出現して皆是真実と証明す。分身の諸仏来集して長舌を梵天に付く」[12]

ここには、『法華経』は過去・現在・未来の三世にわたり、十方世界に出現する諸仏の真実の言葉であって、『無量義経』には、釈尊が『法華経』を説かれるまでの教えを指し「未顕真実」[13]とて、『法華経』が説かれるまでの四十余年間の教えは、釈尊の真実が説かれないことが示されている。さらには、方便品の「要当説真実」[14]と釈尊の最後八年間において、真実が説かれ、大地より涌出された多宝仏が宝塔の中から『法華経』こそが真実であることを証明され、また十方より集った諸仏も遠い梵天のところまで讃えられている。ここに、『法華経』以前に説かれた教えは、権大乗であって、『法華経』こそが実大乗の教えであり、釈尊の真実の教えを説く経典であることが明らかである。

そして、聖人は『法華経』の超勝性を妙楽大師の『法華文句記』の十双歎を依拠とし「二十の大事」として、

迹門では「二乗作仏」を、本門では「久遠実成」を『法華経』の教相から導き出される。この二つ法門を手がかりに、他宗との判別を示されるのである。すなわち、倶舎宗、成実宗、律宗、法相宗、三論宗は権大乗の経典を依拠とし、華厳宗、真言宗は『法華経』を教義を盗みとって、自らの宗旨の一つとして定められている。[15] そのため、「二乗作仏」、「久遠実成」の二つの法門が存在しているようで、実際にはその教義が存在していないのである。このように、『法華経』には「二乗作仏」、「久遠実成」が明らかに説かれていることによって、権大乗と実大乗との分別が明らかとなる。[16] これが、「権実相対」である。

(4)本迹相対

次に実大乗である『法華経』の迹門と本門を相対を確認することによって、聖人が本門重視の立場が明かされる。聖人は「本門寿量品の文の底」とて、一念三千法門が本門寿量品の教相から明かされて、ここに真の一念三千の法門が示される。このことを龍樹菩薩や天親菩薩は、知りながらも、世間に教示することはなく、そして、天台大師の場合はこれを心に懐かれているのである。[17] ここに、

「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり」

とて、聖人が世間に普及されているさまざまな思想を分別される中において、我々凡夫が最も尊崇しなければならない教えとは、一念三千の法門が沈められている本門寿量品であることが知られる。

さて、この一念三千の法門は、地獄界から仏界に至るまでの十界には、それぞれが互いに十界が具わっていることから、その論理が展開される。これは、「一念三千は十界互具よりことはじまれり」[18]の文から窺える。さらに、『法華経』以外の経典を依拠としている各宗派について尋ねると、法相宗と三論宗では、仏界と菩薩界を立てることはしない。また倶舎、成実、律宗等は阿含経によっているために、地獄から天界までの六界の因果は立てているが、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界の四聖を明かすことがないのである。そのことにより、『涅槃経』の「一切有情悉有仏性」[19]の教えを説くことなく、むしろ、この世に生きるすべての衆生たちに仏性が具わっていることを許されていないことが知られる。[20]

すなわち、『法華経』の迹門方便品において「二乗作仏」の法門が明らかになることは、一念三千の論理によって、一切衆生の成仏が可能となる。これまで成仏が不可能とされてきた声聞、縁覚たちも成仏が、このような開三顕一の論理が明かされることによって約束されるのである。これにより、「二乗作仏」が『法華経』の迹門において明かされることで、尓前経には具わってはいない一切衆生の成仏の論理が補われるのである。このことは、

「華厳乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠のみならず、久遠実成を説かくさせ給へり。此等の経々に二の失あり。一には存二行布一故仍未レ開レ権。迹門の一念三千をかくせり。二には言二始成一故曽未レ発レ迹。本門久遠をかくせり。此等の二の大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり。迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。[21]」

の説示から明らかである。しかし聖人は、

「しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず……」[22]

とて、『法華経』の迹門において「開三顕一」を明かし、「二乗作仏」の論理を教示されていても、真の一念三千が顕れないことを明かされている。そして聖人は、本門寿量品において「発迹顕本」が明かされ、本仏釈尊の「久遠実成」が示されることよって、真実の一念三千が成立することを教示される。

ここに、聖人が求められた一切衆生の成仏とは、本門寿量品を依り処とした本仏釈尊による久遠の救済であり、無始の仏界が開顕され、無始の九界の救いが成立する論理が存しなければならない。そして、無始の仏界が無始の九界に具わることによって、本因本果の法門が成立し、ここに九界の真の成仏が達成されるというのである。聖人は迹門で示される理の一念三千の論理は、本門如来寿量品での「発迹顕本」を契機に「二乗作仏」が定まり、我々一切衆生の成仏が達成されるのであることが知られる。

(5)教観相対

このように聖人は、『法華経』の迹門と本門を相対するときには、迹門によって一切衆生の成仏の論理を導き出される。しかし、その論理を成立させるためには、本門寿量品によって久遠の開顕がなければ、「二乗作仏」が定まらないため、本門寿量品こそ最重要である

ことをを教示されているのである。

それによって、「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり」の文が見逃せず『法華経』の教相（教）と寿量品の文底（観）との相対が明らかとなる。すなわち、聖人は一代聖教のうち『法華経』こそ最勝であり、さらに、本門寿量品にこそ本仏釈尊の真実の教えがおさめられていると教示されている。それにより、本迹勝劣の立場に立たれ、本門寿量品を軸に『法華経』に説かれる釈尊の救済の論理を導き出されているのである。そして、観門としての「寿量品の文の底」と示されるのである。ここに、本門寿量品の教相と、「文の底」とてその教相を依拠として実践していく「観心」の不二の関係が顕在化され、我々凡夫が求めるべき法門が寿量品の文の底に存することで、「教」を軸とする「観心」が定まり、教観不二の「信行」が知られるのである。

三、『観心本尊抄』の五重三段

前節において『法華経』の「教相」と本門寿量品の文底の「観心」との相対を尋ね、聖人の教相の論理を確認した。

次に、『観心本尊抄』に教示されている「五重三段」について尋ねることで、聖人の教相論が題目の妙法五字に帰結する構造を確認していく。

『開目抄』の翌年に著述された『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』において、釈尊一代聖教全体を五段階に分け、それらを序分・正宗分・流通分の三段分科によって、末法の時代に相応しい教えについてを教示されている。これを「五重三段」と称し、①一代三段、②十巻三段、③迹門三段、④本門三段、⑤本法三段がある。[23][24]この「五重三段」も『開目抄』における「五重相対」と同じく聖人が天台教学を継承するなかで、独自に示されている教相論である。[25]

(1)一代三段

『観心本尊抄』第二十番の問答にて、正法像法時代の二千年の間では、四依の菩薩方や、仏教者たちは、諸仏や小乗、権大乗、尓前、迹門を説かれている始成正覚の釈尊を仰ぎ、寺院や塔を建立される。が、本門寿量品で開顕された釈尊や本化地涌の四大菩薩を仰ぐ人は、インド、中国、日本において一人も存在していないことを明らかにされている。そこで、第二十一番問

答、すなわち『観心本尊抄』の流通段に到って、前代未聞の法門が詳細に教示されている。

その一番目に示されるのが一代三段である。ここでは、釈尊の一代聖教を序正流通に三段分科すると、釈尊が寂滅道場されてから説かれる『華厳経』より『般若経』までの経典を序分、『無量義経』、『法華経』、『観普賢菩薩行法経』の法華経十巻を正宗分、そして、『涅槃経』を流通分と定めている。このことは次のように記されている。

「答曰法華経一部八巻二十八品進前四味退涅槃経等一代諸経惣括之但一経也。始自寂滅道場終至于般若経序分也。無量義経・法華経・普賢経十巻正宗也。涅槃経等流通分也」[26]

このように、『法華経』十巻こそ正法であることを明かすために、釈尊の一代聖教を分科することを「一代三段」という。

(2)十巻三段

次に十巻三段について確認する。ここでは法華経十巻を三段分科し、『無量義経』と『法華経』の序品が序文、方便品から分別功徳品の前半十九行の偈までの十五品半を正宗分、そして、分別功徳品の後半現在の四信から『観普賢経』までの十一品半と一巻を流通分と定めるのである。このことは次のように記されている。[28]

「正宗於十巻中亦有序正流通。無量義経並序品序分也。自方便品至于分別功徳品十九行偈十五品半正宗分。分別功徳品自現在四信至于普賢経十一品半一巻流通分也」[29]

このように、『法華経』の超勝性を明かすため法華経十巻を分科することを「十巻三段」という。

(3)迹門三段

次にこの法華経十巻を二つに分け、それぞれを三段分科するのである。すなわち、『法華経』迹門と本門の、三段分科を定めるのである。

では迹門三段を確認する。ここでは、序文を『無量義経』と『法華経』の序品、正宗分を方便品から授学無学人記品までの八品、そして、流通分を法師品から安楽行品までの五品と定めている。このことは次のように記されている。

「又於法華経等十巻有二経。各具序正流通也。無量義経序品序分。自方便品至于人記品

八品正宗分。自二法師品一至二于安楽行品一五品流通分」[30]

このように、『法華経』迹門十四品を分科することを「迹門三段」という。

迹門の教えは、始成正覚の仏である釈尊が説かれていることから、今まで明かされることのなかった百界千如の論理が説かれ、尓前経や『無量義経』、『涅槃経』の経典を超過する教えであって、釈尊の随他意、難信難解の教えであることが知られる。この教えを化城喩品の教説に尋ねると、釈尊が大通智勝仏の第十六王子の頃に、衆生に仏種を下されていることが知られる。そして、前四味の経典によって衆生は機根を整えられて、『法華経』の教えにより大通智勝仏の仏種を明らかにしている。しかし、聖人は『法華経』迹門では、釈尊は久遠を開顕されていないことにより「但毒発等一分也」[31]とて、毒を発して煩悩の身を滅することで解脱を得ることのできる衆生は、極少数であることを教示されている。この分科によって、『法華経』迹門の教えにて成仏する衆生は、機根が整えられ、過去のの結縁によって解脱を得られることが窺える。

(4)本門三段

次に、本門三段を確認する。ここでは従地涌出品の前半[32]を序分、涌出品の後半から如来寿量品、そして分別功徳品の十九行の偈までの一品二半を正宗分、分別功徳品後半から『観普賢経』までの十一品半と一巻までを流通分として定められている。このことは次のように記されている。

「又本門十四品一経有二序正流通一。涌出品半品為二序分一。寿量品前後二半　此為二正宗一。其余流通分也」[33]

このように、『法華経』本門十四品を分科することを「本門三段」という。また、本門の教えは、久遠実成の本仏釈尊が説かれていることから、聖人は本門に説かれる教えは迹門や尓前経の教えよりも天と地ほどの違いがあって、我々が住む国土は、仏国土として本仏釈尊が常住される浄土が現れることを教示される。それにより、本門寿量品の教相によって「真の一念三千」の論理が成立される。そして、『法華経』本門を已今当の三説を超過した難信難解の随自意の教えであると定められていることが知られる。

(5)本法三段

最後に、本法三段について確認する。ここでは、十方三世の諸仏が説かれた膨大な数ほど説かれた教えは、すべて本門寿量品の序分であって、寿量品が正宗分にあたり、すべての教えの中心となるのである。そして、一品二半の教え以外は、小乗教や邪教、未得道教、覆相教であると定められ、尓前経、迹門の円教ですらも成仏するための因とはならいことが示されている。聖人はこのことを法師品[34]見宝塔品[35]の教説を引かれることによって、本門の教えこそが末法に生きる我々衆生を救い出す教えであり、下種の教えであることを明かされる。このことは次のように記されている。

「又於本門有二序正流通一。自二過去大通仏法華経一乃至現在華厳経乃至迹門十四品・涅槃経等一代五十余年諸経十方三世諸仏微塵経々皆寿量序分也」[36]

また、聖人は、釈尊在世中に『法華経』本門の教えを聞くことのできた弟子たちについて、次のように教示されている。

「本門序正流通俱以二末法之始一為レ詮。在世本門末法之初一同純円也。但彼脱此種也。彼一品二半此但題目五字也」[37]

すなわち、釈尊在世中の仏弟子方は、前四味、迹門の教えによって仏種は熟されて、本門の一品二半によって解脱を得ることができる。そして、末法の時代においては、『法華経』本門の教えを依拠とし、妙法五字の題目を媒介として、仏種が下されることが知られる。

このように聖人は、『法華経』を釈尊一代聖教の中心とし、本門八品、一品二半、如来寿量品、ついには釈尊の本因本果が具足された仏種である寿量品の文底たる妙法五字を明きらかにされている。そして、「五重三段」が明かされたのちに、末法に生きる衆生救済論理を教示されるために、本門寿量品に説かれる「良医治子喩」に物語について明かされている。この説示では「良医治子喩」にて描かれている「是好良薬」を「寿量品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華経是なり」[38]として、大良薬を寿量品の「肝要」として教示されるのである。すなわち、大良薬たる妙法五字の題目は、釈尊が久遠を開顕された如来寿量品の肝心であって、この五字に釈尊の因行果徳が集約されている。それにより、『開目抄』で示された「寿量品の文の底」とは、「妙法五字」であることが『観心本尊抄』において明らかとなり、「五重相対」や「五重三段」で釈尊の一代聖教の

教相を判別したときには、「妙法五字」に帰結する題目論が明らかとなることが知られる。

ここに、『開目抄』の「教観相対」と『観心本尊抄』の「本法三段」によって、本門の一一文文の教相を包括している寿量品の肝心として妙法蓮華経の五字に帰結する論理が明かされている。そして、『法華経』の題目妙法五字の重要性が明らかとなり、我々凡夫が実践すべき「信行」の論理を探求する課題が求められる。

四、むすびに

以上のように、聖人は『法華経』こそが釈尊の示された教えの中において、最も依り拠とする経典であることが理解できた。「五重相対」と「五重三段」で教相を判別されていることによって、本門寿量品の最重要性が知られる。そして、開顕された本仏釈尊による事の一念三千の救済の論理は、妙法蓮華経の五字に帰結することが明らかとなる。さらに加えて、聖人はこの「妙法五字」を本門寿量品譬説段に説かれている「良医治子喩」での「是好良薬」の大良薬になぞらえて教示されている。[39] すなわち、聖人が求められた釈尊の救済の論理を本門寿量品の「良医治子喩」に求められていることは、見逃すことはできないことを指摘することができる。

註

（1）『大正新脩大蔵経』（以降『大正蔵経』と略）第三四巻一三四頁a

（2）「十双歎」の説示は、日蓮聖人遺文では、『開目抄』をはじめ、『法華取要抄』（『昭和定本日蓮聖人遺文』（以降『昭和定本』と略）八一一頁）と『兄弟鈔』（『昭和定本』九一九頁）にみられる。『法華取要抄』には、『法華経』と諸経を対比させるときには、釈尊が三千塵点劫と五百億塵点劫の久遠の時間軸の中で、衆生の化導が行なわれていることを根拠に、『法華経』の超勝性を明かされている。聖人は「十双歎」のうち第一双目と第十双目の双を重視されていることで、『開目抄』では、釈尊の一代聖教の教相判釈を目的として第一双目の「二乗作仏」、「久遠実成」を用い、『法華取要抄』と『兄弟鈔』では、第十双目の三五塵点劫における釈尊の釈尊の化導の姿、すなわち久遠釈尊による衆生救済の軌跡に気づくことによって、本仏釈尊による久遠の救済の論理を求めることが可能となる。そのことによって、『法華経』の持つ超勝性の根拠には、本門寿量品の教相を依拠とした本仏釈尊による久遠の救済の論理が

求められる。

(3)『昭和定本』五五二頁

(4) 北川前肇稿「本法三段における「本門」の概念」(北川前肇著『日蓮教学研究』第四章日蓮聖人における教相と観心、昭和六十二年・平楽寺書店)を参照。

(5) 日蓮聖人における如来寿量品の位置づけを教相論的に確認していくにあたって、以下の先行研究を確認することができる。清水梁山稿「法華経寿量品に対する台日両祖の異点」(『天晴会講義録』所収、明治四十三年・日蓮讃仰天晴会)、株橋日涌稿「宗祖独発の教判、五重三段について」(『法華思想と日隆教学』所収、昭和五十四年・法華宗興隆学林)、北川前肇稿「日蓮聖人における教相と観心」(北川前肇著『日蓮教学研究』所収、昭和六十二年・平楽寺書店)、山崎美由紀稿「日蓮聖人における五重三段の一考察」(『日蓮教学研究所紀要』第三五号　平成二十年・立正大学日蓮教学研究所)、庵谷行亨編『日蓮聖人と法華経本門寿量品』(平成二十七年・本応寺)、庵谷行亨稿「日蓮聖人における法華経寿量品の受容―鎌倉期を中心に―」『智慧のともしびアビダルマ仏教の展開』〈中国・朝鮮半島・日本篇〉(平成二十八年・山喜房仏書林)、庵谷行亨稿「『開目抄』における法華経寿量品の受容」(『立正大学大学院紀要』第三二号　平成二十八年・立正大学大学院文学研究科)

本稿では、これらの先行研究の示唆を受けて、聖人の「五重相対」、「五重三段」の確認していきたい。

(6)『昭和定本』五三八頁

(7)『昭和定本』五三八頁

(8) なお、釈尊を「大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田」というのは、『無量義経』(『大正蔵経』第九巻三八四頁b～c)や『涅槃経』(『大正蔵経』第一二巻四八〇頁b、五六〇頁a)などの経典にみることができる。

(9) 茂田井教亨著『開目抄講讃』〈上・下〉(昭和五十二年・山喜房仏書林)には、釈尊が三徳具備されている典拠を、日蓮聖人の三大誓願と関連を持つことを指摘している。すなわち、大導師などのいう表現には、『瑜伽論』や涅槃経に典拠を求めながら、三大誓願を照応して、主師親の三徳が象徴されるのである。

(10)『昭和定本』五三八～五三九頁

(11)『昭和定本』五三九頁

(12)『昭和定本』五三九頁

(13)『大正蔵経』第九巻三八三頁b

(14)『大正蔵経』第九巻六頁a

(15)『昭和定本』五三九頁

(16)『昭和定本』五四二頁

(17)『昭和定本』五三九頁

(18)『昭和定本』五三九頁

(19)『大正蔵経』第一二巻五二二頁c。
(20)『昭和定本』五三九頁
(21)『昭和定本』五五二頁
(22)『昭和定本』五五二頁
(23)「本法三段」の名称は、茂田井教亨著『本尊抄講讃』下（昭和六十二年・山喜房仏書林）八九一頁に従っている。
(24)『昭和定本』七一三頁
(25)『法華文句』巻第一上には、一経三段、迹門三段、本門三段の分科が示されている（『大正蔵経』第三十四巻二頁a）。このことから、聖人の天台教学の継承の立場が窺える。
(26)『昭和定本』七一三頁
(27)『大正蔵経』第九巻四四頁c
(28)『大正蔵経』第九巻四四頁c
(29)『昭和定本』七一三頁
(30)『昭和定本』七一三頁
(31)『昭和定本』七一四頁
(32)『大正蔵経』第九巻四一頁a
(33)『昭和定本』七一四頁
(34)『大正蔵経』第九巻三一頁b
(35)『大正蔵経』第九巻三三頁c
(36)『昭和定本』七一四頁
(37)『昭和定本』七一五頁
(38)『昭和定本』七一六頁
(39)『観心本尊抄』（『昭和定本』七一七頁）